九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アリストテレス『形而上学』：Θ巻第一-三章における能動的能力の説明

岩田，圭一
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

https://doi.org/10.15017/19818

出版情報：哲學年報. 70, pp.75-97, 2011-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

アリストテレス『形而上学』Θ巻第一―三章における能動的能力の説明

岩田圭一

一　はじめに

アリストテレスは『形而上学』ZH巻の実体論において感覚的事物の〈実体〉（οὐσία）を探究し、〈実体〉と考えられる四つの候補である「基体」、「本質」、「普遍」、「類」を順に検討している。さまざまな観点からの考察[1]を含むそれらの検討の後、アリストテレスはZ巻第十七章において、〈実体〉が感覚的事物の存在の原因であるという視点を導入し、〈実体〉探究を新たな局面に移行させる。その中（H巻）で、それまで「質料―形相」の対概念によって説明されていたものは「可能態（δύναμις）―現実態（ἐνέργεια）」の対概念によって捉え直され[2]、最終的に、質料と形相からなる結合体の一性の問題をその対概念によって解決するという仕方でその〈実体〉探究は締めくくられる[3]。続くΘ巻では、「可能態―現実態」の対概念そのものについて、より広い視点から考察が行われ、ZH巻の実体論はその内容をさらに充実させることになる。ZH巻において「第一の〈実体〉」としての形相が現実態であることが示

され、Θ巻において「可能態―現実態」の対概念の考察を通じて、現実態としての形相という考えの意味がより詳しく説明されるのだと考えられる。このようにZH巻の実体論にΘ巻の「可能態―現実態」論が加わることで実体論は十全なものになるのだと解するなら、ZHΘ巻は感覚的事物の存在について考察する一つのまとまった実体論をなしていると言うことができるだろう。[4]

しかしながらΘ巻のほぼ半分を占めるΘ巻第一―五章の論述を見ると、Θ巻をZH巻の実体論の続きとみなすことには問題があるように思われてくる。というのもΘ巻第一―五章は、ZH巻の実体論と直接的には関係していないように見える概念、すなわち、「運動との関係において（κατὰ κίνησιν）言われるデュナミス［能力］」（Θ1, 1046a1-2, Θ6, 1048a25）についての考察にあてられているからである。[5] また、「可能態―現実態」の対概念が主題化されるΘ巻第六章以降においても、ZH巻の実体論との関係が希薄であるような内容が含まれており、[6] このことも Θ巻を実体論の一部とみなすことの妨げであるように思われる。Θ巻がZH巻とどのように関係しているかという問題に一定の解決を与えるには、Θ巻における考察の全体を検討し、その構造を把握する必要がある。とくにΘ巻第一―五章における能力としてのデュナミスについての考察がΘ巻においてどのような意義をもっているかを明らかにすることが重要であると考えられる。

アリストテレスはΘ巻第一―五章のデュナミス論において、まず、「デュナミス」という語の用法を区別し、能動的能力としてのデュナミスが第一の用法であり、他の用法のデュナミス――受動的能力など――はこの第一の用法との関係において規定されることを明らかにし（Θ巻第一章）、その上で、能動的能力を考察の中心に据えてそのデュナミス論を展開している。具体的には、技術的な知識を典型とする理性的な能動的能力と、熱や冷といった非理性的な能動的能力との区別についての考察から始めて（Θ巻第二章）、能力とその行使ないし活動（ἐνέργεια）との区別（Θ巻第三章）、不可能であること、および推論における可能と不可能についての考察（Θ巻第四章）、さらに能力が

行使される条件についての考察（Θ巻第五章）へと進む。Θ巻におけるΘ巻第一―五章のデュナミス論の意義を考えるにあたってとくに注目するべきは、Θ巻第三章におけるメガラ派批判を通じた能力と活動との区別である。アリストテレスは、行使されていない能力の存在を否定するメガラ派の見解を批判することによって、そのような能力の存在を確保しようとする。これは、Θ巻第六章において示される「可能態―現実態」の区別へとわれわれを導いてくれるように思われる。われわれはΘ巻第三章を軸にして、Θ巻におけるΘ巻第一―五章のデュナミス論の意義を明らかにすることができるのではないかと期待される。しかし本稿では、Θ巻におけるΘ巻第一―五章のデュナミス論の意義を明らかにするということは行わず、その前に行っておくべき作業、すなわち、「デュナミス」の第一の用法である能動的能力についてどのような説明が与えられているかを明らかにするという作業を行うことにする。[7] 本稿で扱うテクストの範囲は、Θ巻第一章における「デュナミス」の規定から、Θ巻第三章におけるメガラ派批判の前半部までとし、メガラ派批判の全体を把握すること、そしてΘ巻におけるメガラ派批判の意義を明らかにすることは別の機会に行うことにする。以下では、まずΘ巻第一章における能動的能力の規定について考察し、次にΘ巻第二章における能動的能力の区別を明らかにする。その上で、Θ巻第三章におけるメガラ派批判の前半部の論述を取り上げ、能動的能力がどのように問題にされているかを見ることにする。

二　能動的能力の規定

アリストテレスはΘ巻第一章において、「デュナミス」の第一の用法である能動的能力を、「他のもののうちにある、あるいは他のものとしての限りにおける［自分自身のうちにある］、変化[8]の原理（ἀρχὴ μεταβολῆς ἐν ἄλλῳ ἢ ἢ ἄλλο）」（Θ1, 1046a11）と規定している。Δ巻第十二章で同じ規定をする際、アリストテレスはそのような原理の例として建築術を挙げ、「これは建築されるもの（οἰκοδομούμενον）のうちにあるのではない」（Δ12, 1019a16-17）と説明し

ている。この説明によれば、建築術は、建築される家とは別のものである建築家のうちにあるのだと理解できる。[9] この建築術の例から能動的能力の規定を理解するなら、アリストテレスはその規定において変化の産物ないし目的に視点を置き、能動的能力がその産物ないし目的とは別のもののうちにあると述べているように思われる。しかし医術を例にとると、そのようには言えないことがわかる。医術の例は、能動的能力の規定に付加されている補足、すなわち、「他のものとしての限りにおける［自分自身のうちにある］」という補足の意味を説明するために挙げられている（1019a17-18）。医術は治療されるもののうちにあるのではなく、治療されるものとは別のもの（医者）のうちにあると言われるが、医者が自分自身を治療する場合、医術は治療されるもの（医者自身）のうちにあるのであって、治療されるものとは別のもののうちにある、とは言えないように思われる。この場合、医術は「他のもののうちに」あるのではなく、自分自身のうちにあることになり、能動的能力の規定に合わないように見える。これについてアリストテレスは、治療されるものが医者自身であっても、治療する医者と治療される医者を別々のものとみなすことによって、医者が医者自身を治療する場合も先の規定で問題はないと考えた。つまり、治療するものと治療されるものが同じ医者である場合、医術は、治療されるものとしての医者のうちにあるのではなく、それとは別のものとみなされる治療する医者のうちにあるという仕方で「他のもののうちに」あると考えたのである。

先ほど、建築術の例から考えて、アリストテレスが能動的能力の規定において、変化の産物ないし目的に視点を置き、能動的能力をその産物ないし目的とは別のもののうちにあるものと考えていると述べた。しかし医術が、治療されるものとは別のもののうちにあると言われる場合、治療されるものは健康でない（病気の）人間であって、治療の産物ないし目的（健康な人間）ではない。つまり医術の例を見ると、アリストテレスは能動的能力の規定において、変化の産物ないし目的ではなく、変化の起点にあるものに視点を置き、それとは別のもののうちに医術があると考えているように思われる。このように考えると、アリストテレスが能動的能力の規定において、何に対して「他のもの」

と言っているかについて一貫した考えをもっていないように見えるかもしれない。確かに、変化の起点に対して「他のもの」と考えることと、変化の産物ないし目的に対して「他のもの」と考えることとは異なることである。しかしアリストテレスがここで何に対して「他のもの」と言っているかを考える場合、変化の起点と産物ないし目的との区別は問題になっていないと考えるべきである。というのもアリストテレスはここで、変化を引き起こす側のものと変化が引き起こされる側のものとの区別を考えているからである。ここでは、変化が引き起こされる側のものの中での区別、すなわち、変化の起点と産物ないし目的との区別は問題になっていないと考えるべきである。具体的に言うと、建築術は、建築という変化が引き起こされる側のもの――木材や石といった質料から一つの家という完成体に向かっているもの[10]――のうちにあるのではなく、それとは別の、建築という変化を引き起こす側のもの（建築家）のうちにある。同様に医術は、治療という変化が引き起こされる側のもの――病気の状態から健康な状態に向かっているもの――のうちにあるのではなく、それとは別の、治療という変化を引き起こす側のもの（医者）のうちにある。このように理解すると、アリストテレスが能動的能力の規定において、能動的能力が何に対して「他のもの」のうちにあると述べているのかについて、一般的な説明を与えることができるだろう。すなわち、能動的能力は、当の変化が引き起こされる側のものに対して「他のもの」――当の変化を引き起こす側のもの――のうちにある、と説明することができるだろう。

変化を引き起こす側のものと変化が引き起こされる側のものとの区別をアリストテレスが念頭に置いていたことは、Θ巻第一章のテクストからも読み取ることが可能である。アリストテレスはΘ巻第一章において、能動的能力と受動的能力とを区別するのに、能動的能力をもつものと受動的能力をもつものとが異なることに言及している（Θ1, 1046a22-28）。能動的能力をもつものと受動的能力をもつものとの区別は、ちょうど、変化を引き起こす側のものと変化が引き起こされる側のものとの区別に対応する。受動的能力をもつものについては、少し説明を加えておく必要があ

るだろう。例えば建築術の場合、建築という変化を受動するのは家ではなく、家の質料であるが、その変化の起点としての質料に限定されるわけではない。部分的には家になっているような未完成の家もまた、建築という変化を受動するのであり、変化の起点としての質料から未完成の家までが受動的能力をもっていると言うことができる。医術の場合も同様であり、変化の起点としての病気の人間から、完全に健康であると言える前の人間までが、治療という変化を受動する能力をもっていると言える。こうして、アリストテレスが能動的能力の規定に際して、変化を引き起こす側のものと変化が引き起こされる側のものとの区別を念頭に置いて、「他のもの」という表現を用いていたということが確認されたことになる。

三　能動的能力の区別

次に、能動的能力を二つの種類に分けるΘ巻第二章の論述を見ることにしたい。アリストテレスはΘ巻第一―五章のデュナミス論において、技術的な知識を典型とする能動的能力を中心に考察を進めているが、まずΘ巻第二章において、技術的な知識とは異なる種類の能動的能力との対照によって、技術的な知識としての能動的能力がどのようなものであるかを明らかにしている。

前節で見たように、アリストテレスはΘ巻第一章において能動的能力と受動的能力を区別するにあたって、能動的能力をもつものと受動的能力をもつものとの区別を念頭に置いていたが、Θ巻第二章において能動的能力の種類を区別するにあたって、まず、能動的能力をもつものがどのようなものであるかという点に着目する。能動的能力をもつものには、魂をもたないものと、魂をもつものとがある（Θ2, 1046a36-37）。例えば熱くする能力をもつ火は魂をもたないものであり、建築術（建築する能力）をもつ建築家は魂をもつものである。火は、熱くされる能力をもつもの、例えば鍋の水に近づけられると、その水を熱くする。これに対して建築家は、建築される能力をもつもの、例えば一

定の木材や石に近づいたからといって、建築するとは限らない。建築術は建築家の魂、厳密にはその理性的部分（τὸ λόγον ἔχον）にあり（1046a37-b1）、建築家はこの理性的部分を働かせる必要がある。[二] アリストテレスの考えでは、建築術は建築家の魂の理性的部分のうちに知識（ἐπιστήμη）として存在し、この知識は家の建築に関する説明方式（λόγος）からなっている。これに対して、火のうちにある能動的能力、すなわち、熱くする能力は、火が本性上もつ属性であり、知識や説明方式として存在しているのではない。これらの例から明らかなように、アリストテレスは能動的能力を、魂の理性的部分のうちに知識として存在するものと、何らかの自然的存在のうちに本性的属性として存在するものとに区別している。前者の能動的能力は魂の理性的部分の働きを伴うので「理性とともにある（μετὰ λόγου）」能力（理性的能力）と呼ばれ、後者の能動的能力は「非理性的（ἄλογοι）」能力と呼ばれる（1046b1-2）。

アリストテレスはさらに、理性的能力と非理性的能力との区別について、それらがもたらす結果の観点から考察を進めている。それによると、非理性的能力が一つの結果をもたらす能力であるのに対して、理性的能力は反対する二つの結果をもたらす能力であるとされる（1046b4-6）。例えば火（熱くしうるもの）は熱くされうるものを熱くするだけであるが、医術は健康と病気のどちらでも作り出せる能力とみなされる（1046b6-7）。医術は本来、病気の人間を健康にする知識であり、その知識は健康に関する説明方式からなっている。医術における説明方式は自体的には（καθ’ αὐτάς）健康に関するものであるが、付帯的には（κατὰ συμβεβηκός）病気に関するものでもある(1046b10-13)。なぜなら健康に関する説明方式の否定によって病気についての理解が得られるからである（1046b13-14）。その意味で医者は健康だけでなく病気についても知っており、その気になれば、健康な人間を病気にすることも可能である。医者が健康と病気の両方をもたらしうることについては、より一般的に次のように述べられている。

反対のもの（τὰ ἐναντία）［例えば健康と病気］が同じもの［健康によいもの］のうちにあることはなく、また知識は説明方式をもっていることによって能力であり、そして魂［魂の理性的部分］は運動の原理（κινήσεως … ἀρχή）［知識］をもっているのだから、健康によいものが健康だけを作り出し、熱くしうるものが熱だけを、冷たくしうるものが冷だけを作り出すのに対して、知識をもっているもの（ὁ δ' ἐπιστήμων）は両方［反対する二項の両方］を作り出す。（Θ2, 1046b15-20）

ここでアリストテレスは、反対する二つの結果をもたらしうる能力を、一つの結果しかもたらさない能力との対比によって示している。例えば健康によい食物は、それを摂取する人間にとくに問題がない限り、その人間を健康にするのであって、病気にはしない。それは、上の引用で述べられているように、健康によいもののうちに健康と病気——厳密には健康をもたらす能力と病気をもたらす能力——の両方が含まれているのではないからである。健康によいもののうちには、健康をもたらす能力しか存在せず、それゆえ、健康だけを作り出す。これに対して、医術の知識をもっているものは健康と病気の両方をもたらしうる。その理由は、上の引用に従って説明すると、こうなるだろう。医術の知識は、それが健康に関する説明方式からなっていることによって医者の魂の理性的部分のうちに存在しており、健康と病気の両方をもたらしうる能力、すなわち運動の原理として存在しているからである。これはさらに、アリストテレスによって次のように説明されている。

というのも説明方式は、同じ仕方においてではないが、両方［反対する二項の両方］に関係しており、そしてそれ［説明方式］は、運動の原理［知識］をもっている魂［魂の理性的部分］のうちにあるからである。したがってそれ［魂の理性的部分］は、両方［反対する二項の両方］を、同じもの［同じ説明方式］と関係づけた上で

（πρὸς ταὐτὸ συνάψασα）、同じ原理［同じ知識］から［によって］動かすだろう（ἀπὸ τῆς αὐτῆς ἀρχῆς κινήσει）。（Θ2, 1046b20-22）

医術における説明方式は、すでに見たように、自体的には健康に関係し、付帯的には病気に関係している。医者はそのような説明方式からなる知識を魂の理性的部分のうちにもっている。ここからアリストテレスは、健康をもたらす運動（治療）と病気をもたらす運動について、上の引用の「したがって」以下のように説明する。それに従って言うと、魂の理性的部分は、健康と病気の両方を、同一の説明方式――自体的には健康の説明方式――と関係づけた上で、同一の知識（医術の知識）によって動かす、となるだろう。健康を動かすとか病気を動かすという言い方が奇妙に思われるかもしれない。これは、健康への運動、病気への運動を引き起こすという意味だと理解できるだろう。それらの運動が何によって始められるのかというと、「同じ原理」と言われる医術の知識によって始められるとされている。医術の知識によって健康への運動、あるいは病気への運動が始まるということであるが、上の引用には、健康と病気の両方を同じ説明方式――医術の知識を構成している健康の説明方式――と関係づけた上でということが付け加えられている。健康ないし病気への運動を引き起こすにあたって健康ないし病気を健康の説明方式と関係づけるというのは、医者の理性的部分が、或る人間のうちに健康ないし病気を作り出すために、健康とは何であるかについて考えることから始めるということを意味していると考えられる。技術的な知識に従う運動において説明方式が起点になることは、『形而上学』Z巻第七章（Z7, 1032b6-10, 15-21）においてすでに説明されている。アリストテレスはそこで、医者が病気の人間を健康にする運動について、健康とは何であるかといったことを考える思惟（νόησις）のプロセスと、病気の人間の身体に施術する制作（ποίησις）のプロセスを区別している。医者はまず、理性を働かせて、健康とはしかじかであり、それは身体における熱と冷の均衡であり、その均衡のためには熱が必要であり、熱を

もたらすには摩擦が必要であるといったことを考え、次に実際に、その人間の身体を摩擦して熱をもたらし、熱と冷の均衡をもたらし、結果的に健康にする。Z巻第七章では、健康への運動の起点は、思惟のプロセスがそこから始まるところの健康という形相であり、この形相は医者の魂のうちにあるということが明確に語られている（1032b21-23）。Θ巻第二章では、医者の魂の理性的部分のうちにあるものとして、健康という形相ではなく、医術の知識が挙げられているが、医術の知識は健康の説明方式からなっており、その説明方式はまさに健康という形相に関するものであるのだから、Z巻第七章とΘ巻第二章において言われていることは同じことであるだろう。[72] Θ巻第二章で言われている、健康ないし病気を健康の説明方式と関係づけるというのは、Z巻第七章の言い方では、制作のプロセスに先立って思惟のプロセスがあるということになるだろう。

このようにΘ巻第二章では、技術的な知識としての能動的能力が二つの結果をもたらしうるものであることが、非理性的能力との対照によって明らかにされている。Θ巻第一章における「デュナミス」の用法の規定によって第一のものとして明らかにされた能動的能力は、Θ巻第二章において、二つの種類に分けられ、それら二種類の能力がもたらす結果の観点から考察が行われた。続くΘ巻第三章では、アリストテレス自身の見解とは異なる見解が取り上げられ、それに対する批判が行われる。次に、Θ巻第三章のメガラ派批判において問題になるメガラ派の見解がどのようなものであるかを確認することにしたい。

四　メガラ派の見解

アリストテレスはΘ巻第三章の冒頭で、批判されるべきメガラ派の見解を次のように提示している。

次のように言う人々、例えばメガラ派の人々がいる。活動しているときにのみそれは［当の活動が］可能であ

る［当の活動の能力をもっている］のであって（ὅταν ἐνεργῇ μόνον δύνασθαι）、活動していないときにはそれは［当の活動が］可能ではない［当の活動の能力をもっていない］（ὅταν δὲ μὴ ἐνεργῇ οὐ δύνασθαι）。例えば建築活動していない者は建築活動が可能ではない［建築する能力をもっていない］のであって（οἷον τὸν μὴ οἰκοδομοῦντα οὐ δύνασθαι οἰκοδομεῖν）、建築活動している者が建築活動しているときに［彼は建築活動が可能である（建築する能力をもっている）］（τὸν οἰκοδομοῦντα ὅταν οἰκοδομῇ）。そしてその他の場合も同様である。（Θ3, 1046b29-32）

ここで示されるメガラ派の見解とは、何かが或る能力をもっているのはその何かがその能力を発揮して活動しているときに限られるというものである。これは、上の引用にも示されているとおり、その何かがその能力を発揮して活動していないときにはその能力をもっていないということである。この見解においては、発揮されていない能力というものは存在しない。アリストテレスはこの見解の不合理を示すことによって、発揮されていない能力の存在を確保しようとする。アリストテレスの批判を見る前にメガラ派がなぜそのような見解を主張するのかを考える必要があるが、アリストテレスはここでメガラ派の主張の論拠には触れていない。また文献的にも当時のメガラ派についてはっきりしたことはわかっていない[13]。われわれがメガラ派の言うことにも一理あると言うことができるとすれば、それは次のような考えからだろう。すなわち、何かのうちに或る能力が存在することは、その能力が発揮されているときに示される、という考えからだろう。例えば或る人が建築する能力をもっていることは、その人が建築活動しているときに示される。彼は現に建築活動している限りにおいて、建築する能力を間違いなくもっている。われわれの常識からすると、その建築家を建築家として知っている場合、そしてそのことをとくに疑わない場合、彼が現に建築活動していないときも彼が建築する能力をもっていることをわれわれは認めるだろう。しかしメガラ派は、上の引用に示さ

れているとおり、これを認めない。彼が建築家であることをわれわれが知っていようがいまいが、彼が現に建築活動していないとき、彼は建築する能力をもっていない、とメガラ派は主張するのである。

メガラ派はなぜこのような奇妙な主張をするのだろうか。一つの可能性として、建築活動が可能であると言うときの「可能である」ということの捉え方が、われわれの常識とメガラ派との間で異なっているのではないかということが考えられる。われわれは或る建築家が休憩しているのを見て、彼は建築することが可能でないとは考えない。なぜなら実際のところ、彼が休憩をやめて働く気になれば、彼が建築活動を始めることは簡単に想像できるし、よほどの事態が起きない限り、建築活動を始めるだろうということを経験的に知っているからである。しかしこのような常識的な考え方とは異なる仕方で、「可能である」ということを考えることもできる。或る建築家が建築することが可能であると言えるのは、いつだろうか。彼が建築術を失わずにもっていさえすればよいとわれわれは言うだろう。建築術をもっていて建築することが可能である彼は、建築する気になって、建築するための道具や資材がそろっているところに行き、その他の妨げになるような事態が生じなければ、建築活動を始めるだろう、とわれわれは考える。[14] しかしここで、建築する気になること、道具や資材がそろっていること、天候など妨げになるような事態が起きないことなどがすべてととのったときに、はじめて彼は建築することが可能であり、建築する能力をもっているのだと考えると、どうだろうか。これらのことがすべてととのったときもまだ、彼は建築することが可能ではないかもしれない。実際に建築活動を始める瞬間までは、いかなる事態が起こるかわからないからである。このように考えていくと、彼が道具をもって資材に働きかけた瞬間にはじめて彼は建築することが可能であり、建築する能力をもっていると言えることになるだろう。道具をもって資材に働きかけたとき、言うまでもなく彼は建築活動しているのであり、この考え方において、建築する能力をもっていることは建築活動しているときにのみ成り立つことになる。

ここで、建築することが可能であると言えるための条件として挙げられているものは、実際は、建築活動が生じる

ための条件である。メガラ派は、或る活動が可能であると言えるのはいつなのかを判断するにあたって極度に慎重になり、活動が生じるための条件を、「可能である」と言えるための条件にしてしまったのだと考えられる。実際のメガラ派がこのような考えからその見解を主張したのかどうか確かめることはできないが、これは、メガラ派の見解の、一つのありうる論拠であると言えるだろう。[15]

五　メガラ派批判における能動的能力

アリストテレスはメガラ派の見解を提示した後、その見解に立った場合に生じる四つの不合理を示すことによって反論を行っている。その不合理を見ること自体は、アリストテレス自身も言うように、困難なことではない（Θ3, 1046b32-33）。本稿では能動的能力を主題としているので、それら四つの反論のうちの最初の三つ[16]を取り上げ、それぞれの反論がどのように行われているかを確認することにしたい。メガラ派批判としては、メガラ派の見解を運動否定論として示す第四の反論が最も重要なものであるが、これについては別の機会に論じることにする。

最初の反論は、技術的な知識としての能動的能力に関して行われ、メガラ派の見解が提示される際に言及されたのと同じ建築術が例に挙げられる。アリストテレスはまず、建築家の本質という点からメガラ派の見解の不合理を示す。建築家の本質は「建築活動が可能なものであること（τὸ δυνατῷ εἶναί … οἰκοδομεῖν）」であるが（1046b34-35）、メガラ派の見解では、或る建築家が現に建築活動していないとき、彼は建築活動が可能ではない。或る建築家という存在を認めた上で、彼が現に建築活動していないなら彼は建築活動が可能ではないと語ることは、建築活動が可能である者について建築活動が可能ではないと語ることであるが、これは明らかに不合理である。アリストテレスのこの反論に対して、メガラ派がそれでも自身の見解に固執するなら、次のようなことになると考えられる。すなわち、その建築家は現に建築活動しているときに建築家であり、現に建築活動していないときは建築家ではなくなっている、と。

建築家とは建築活動が可能なものであるということを認めた上で、それでもメガラ派の見解、すなわち、現に建築活動しているときにのみ建築活動が可能であるという見解を保持しようとすると、同一の建築家が建築活動をやめれば建築家でなくなり、建築活動を始めれば建築家であると言わざるをえなくなるのである。同一の建築家が建築家でなくなったり建築家に戻ったりするということは、奇妙なことである。もちろん長い間建築活動をしていないことによって建築家とは言えない状態になり、そこから再び訓練して建築家になるということはありうるが、ここで問題になっているのは、午前中に建築活動し、昼休憩に建築活動をやめ、午後に再び建築活動するというような場合である。その建築家が昼休憩中だけ建築家でなくなるというのは明らかに問題である。アリストテレスはこのような問題のある再反論を念頭に置いて、次のように述べているのだと考えられる。

もしそのような諸技術を、或るとき学習して獲得したのではないのにもっているとか、或るとき失ったのではないのにもっていないといったことが不可能であるなら（［失ったとすればそれは］実際、忘却によってか、何らかの出来事によってか（πάθει τινὶ）、時間［の経過］によってかである。というのも実のところ、そのもの（τὸ πρᾶγμα）［技術自体］は消滅しないからである。なぜならそれは常に存在するのだから）、彼［建築家］は［建築活動を］やめるたびにその技術［建築術］をもっていないことになるが、彼はどのようにして［その技術を］獲得して再びすぐに建築活動するのだろうか。（Θ3, 1046b36-1047a4）

この引用の中の、とくに最後に述べられていることが、メガラ派による再反論の不合理を示している。或る建築家が建築活動をやめるたびに建築家でなくなったり、建築活動を再開して建築家に戻ったりすることは、技術の獲得と喪失に関する事実から、不合理であることが示されるのである。建築活動をやめることは建築術を失うこととは異な

る。上の引用に示されているように、忘却などによって建築活動ができなくなることが、建築術を失うことである。また、建築家ではなくなった者が再び建築活動を始めるには、建築術をもう一度学習、獲得する必要があり、それには相応の時間がかかる。昼休憩中に建築家でなくなっていた者が、休憩を終えた瞬間に建築家に戻るということは、ほとんど考えられない。このようにメガラ派に対するアリストテレスの最初の反論においては、技術的知識としての能動的能力に関してメガラ派の見解の不合理が明らかにされる。

第二の反論は、Θ巻第二章において言及された非理性的能力に関して行われる。アリストテレスは第二の反論を始めるにあたって、「魂をもたないものについても同様である」（1047a4）と述べているが、「魂をもたないもの」とは非理性的能力をもつもの、例えば熱くする能力をもつ火などのことであると考えられる。[17] 能動的能力としての非理性的能力をもつものに言及した上で、第一の反論で明らかにされたことと同様のことになるとアリストテレスが述べていることから判断すると、われわれはメガラ派の見解として、例えば熱くしうるものとしての火が熱くする能力をもっているのは火が現に何かを熱くしているときだけであるといったことを予想するだろう。そしてその見解の不合理が示されるのだろうとわれわれは期待する。第二の反論の内容を見ると、「魂をもたないもの」の例の中に、冷たいものと熱いものが挙げられており（1047a5）、これらはそれぞれ、冷たくしうるもの、熱くしうるものとして、つまり能動的能力である非理性的能力をもつものとして理解されているのだろうとわれわれは考えたくなる。ところがアリストテレスはわれわれの予想とは異なる仕方で第二の反論を行っている。第二の反論において、冷たいものや熱いものは、冷たいと感覚されうるもの、熱いと感覚されうるものとして示されている。つまり、感覚されうるという受動的能力をもつものとして示されている。「魂をもたないもの」という言い方は、Θ巻第二章における能動的能力としての非理性的能力をもつものを示しているように思われるが、アリストテレスはここで、魂をもたないものを、非理性的能力をもつものとしてではなく、感覚されうるという受動的能力をもつものとして捉え直すのである。そして感

覚されうるという受動的能力が現に発揮されているときにのみ、すなわち現に感覚されているときにのみ、感覚されうるものは存在するのだということを、メガラ派の見解として提示しているように思われる。第二の反論はごく簡単に次のように示されている。

そして魂をもたないものについても同様である。というのは、冷たいものも、熱いものも、甘いものも、一般に感覚されうる（αἰσθητόν）いかなるものも、それらが感覚されていないなら（μὴ αἰσθανομένων）、存在しないことになるからである。したがって彼ら［メガラ派の人々］は、プロタゴラスの説を語っていることになる。（Θ3, 1047a4-7）

例えば熱いものは熱いものとして感覚されていなくてもそのようなものとして存在しているとわれわれは考えるが、メガラ派の見解では、現に熱いと感覚されているときにのみ熱いものとして存在しており、現に熱いと感覚されていないときは熱いものは存在していないことになる。われわれの考えでは、火は感覚されていなくても熱いが、このことはとくに、熱いものを熱くしうるものとして捉えたときによくわかるだろう。例えば誰も知らないうちに火が山を燃やしてしまっている場合、火が熱くしうるものとして存在しており、それが現実に発揮されたことを示しているだろう。火はわれわれの感覚と関係なく、熱いもの、熱くしうるものとして存在しているのであり、現に熱いと感覚されていなければ熱いものとして存在していないなどということは考えられない。

アリストテレスは上の引用において、この場合のメガラ派の見解がプロタゴラスの説と同じものになることに言及しているが、本当にそのとおりであるかどうかについては疑問の余地がある。プロタゴラスの説としては、熱いことと熱いと感覚されていることが同じことであり、熱いと感覚されているものは熱く、熱いものは熱いと感覚されてい

る。この説では、本当は冷たいのだが、誤って熱いと感覚されているということはなく、熱いと感覚されていれば熱い。上の引用でメガラ派の見解として示されているのは、熱いと感覚されていないものは熱くないということである。これは、熱いものがあるとすれば、それは熱いと感覚されているということであって、熱いと感覚されているものはすべて熱いということではない。[18] つまり、上の引用に示されている限りのメガラ派の見解では、熱いと感覚されているが実際は熱くないという可能性が排除されていない。言い換えれば、感覚が誤りうるものであることが排除されていない。プロタゴラスの説では、感覚は真実であり、感覚が誤りうるという考えは排除されている。もしメガラ派の見解がプロタゴラスの説と同じであるとしたら、メガラ派は、熱いと感覚されているものはすべて熱いということも認めなければならないだろう。しかしアリストテレスは上の引用で、メガラ派がそれを認めたかどうかを語ることなく、「したがって」メガラ派の見解はプロタゴラスの説と同じであると述べている。「したがって」と言われていることに意味があると解するには、上の引用で述べられていないこと、すなわち、熱いと感覚されているものはすべて熱いということをメガラ派の見解として補う必要がある。この補足が正当なものかどうかについては意見が分かれるところであるが、「したがって」と言われていることに意味があると認めるには、その補足はせざるをえないだろう。また、第一の反論から、現に活動しているときにのみ当該の活動が可能であるということを考慮に入れるなら、現に熱いと感覚されているときにのみそれは熱いと感覚されうるということをアリストテレスは言いたいのだろうと考えることができる。このように考えて、アリストテレスはここで、熱いと感覚されているものはすべて熱いということを認めているのだと言うこともできるだろう。

次に第三の反論を見ることにしたいが、これは第二の反論との関連で言われたものであると考えられる。第二の反論で受動的能力としての感覚が問題にされたが、第三の反論では能動的能力としての感覚が問題にされているように見える。これまでのΘ巻第一―二章における「デュナミス」に関する考察では、能動的能力として、技術的な知識で

ある理性的能力と、自然的存在の本性的属性である非理性的能力が認められていたが、人間の魂の能力である感覚については問題にされていなかった。アリストテレスはこれまでの考察において、なぜ感覚を能動的能力として示さなかったのか。これは、感覚が単純に能動的であるとは言えないからではないだろうか。例えば見るという視覚について考えてみると、確かに見る者に対して見られるものがあり、能動的なものと受動的なものを区別することができるが、見るということは、目を開いたときに自然と対象が映るという意味で、視覚対象から作用を受けることを本性とするように思われる。[19] 見る能力と建築する能力を同じ仕方で能動的能力とみなすことは問題である。またΘ巻第六章では、見ることは、建築することのようないわゆる運動とは区別され、特別な意味において「行為（πράξις）」と呼ばれている（Θ6, 1048b22-28）。そのような行為の能力と考えられる感覚は、これまでのΘ巻第一―二章の考察で理解されている能動的能力には分類しがたいように思われる。[20] こうしたことを考慮に入れると、第三の反論は、第二の反論との関連で出てきたものであり、必ずしもΘ巻第一―二章の考察の延長上にあるわけではないと言うこともできるだろう。とはいえ、感覚されうるという受動的能力との対比を考えると、やはりここでは、感覚は能動的能力とみなされていると考えるべきだろう。

第三の反論は、メガラ派の見解の不合理を示すという意味では明快である。現に活動しているときにのみその能力をもっているというメガラ派の見解に従うと、「もし人が感覚することも活動することもしていないなら（μὴ αἰσθάνηται μηδ᾽ ἐνεργῇ）、彼はまったく感覚［能力］（αἴσθησις）をもっていないことになる」（1047a7-8）。感覚することも活動することもないというのは、人が現に感覚を働かせていないということであり、その場合、メガラ派の見解によるなら、彼は感覚能力をもっていないことになる。視覚をもっている者が視覚を働かせていないときに視覚を失っているというのは奇妙なことである。アリストテレスは「同じ人が一日の間に何度も盲目になる」（1047a9-10）と言って、メガラ派の見解の不合理を示している。

さて、これら三つの反論から、アリストテレスが能動的能力をどのようなものとみなしていたかが見えてくる。ここで問題にされている能動的能力は、技術的な知識（理性的能力）と感覚能力である。それに、直接的に扱われているわけではないが、非理性的能力も加えてよいだろう。理性的能力は、第一の反論において言われていたように、獲得され、失われるものであり、或る特定の理性的能力をもつものにとってその理性的能力は本質的なものである。例えば建築術という理性的能力は、これをもつ建築家にとって本質的なものである。建築家を建築家たらしめている建築術は、瞬時に失われたり瞬時に獲得されたりするようなものではなく、その建築家に本質的に属しているもの、すなわち、本質的属性であると言える。理性的能力は、これをもつものにとっての本質的属性なのである。このことは、感覚能力にも非理性的能力にも言えることである。例えば見る能力は見る能力をもつものにとって本質的であり、熱くする能力はこれをもつ火にとって本質的である。アリストテレスはメガラ派批判を通じて、Θ巻第一―二章では明らかにしていなかったこと、すなわち、能動的能力とこれをもつものとがどのような関係にあるかということを明らかにしている。能動的能力がこれをもつものにとっての本質的属性であるということは、メガラ派批判によってアリストテレスが主張したいこと、すなわち、行使されていない能力が存在するということにとって重要なことである。というのも、行使されていない能力は現に存在するものとしては確認できないのであるが、この確認できないものがそれでも確かに存在することはこれをもつものが存在することによって保証されるからである。この保証が成り立つのは、行使されていない能力がこれをもつものの本質的属性として存在しているからである。或る行使されていない能力をもつものはその能力を本質的属性としてもっているのだから、その能力をもつものが存在するとき、その能力は現に確認されていないとしても存在していることになるのである。Θ巻第三章におけるメガラ派批判はこのように、能動的能力に関して、Θ巻第一―二章において明らかにされていなかった重要な特徴を明らかにしており、その意味で、Θ巻第一―二章に続く不可欠の考察であると言うことができるだろう。

六　おわりに

以上によって、Θ巻第一―三章において能動的能力がどのように説明されているかが明らかになったと思う。簡単にまとめるなら、能動的能力は運動の原理であり、これをもつものの存在を前提としているということ、そして能動的能力がもたらしうる結果の観点から理性的能力と非理性的能力とが区別されるということ、さらに能動的能力はこれをもつものにとっての本質的属性であるということが明らかになった。このような能動的能力に関する論述は、Θ巻第三章のメガラ派批判による、行使されていない能力の存在の確保へとつながるものであり、Θ巻におけるメガラ派批判の意義が示されるなら、本稿で見た能動的能力に関する論述の意義も示されることになるだろう。Θ巻におけるメガラ派批判の意義を明らかにするには、Θ巻第三章におけるメガラ派批判の全体を取り上げる必要がある。これについては、はじめに述べたように、別の機会に論じることにしたい。ここでもし能動的能力に関する論述に、もう少し広い視野からその意義を見出すとすれば、それは、Λ巻における不動の動者に関する考察との関連を指摘することだろう。感覚的事物を対象とするＺＨΘ巻の実体論にも、そのような動者への言及が見られる(Z17, 1041a7-9, Θ8, 1050b4-6)。それは究極的な動かすものであり、世界の運動の原理である。これとの関連で、本稿で見た能動的能力の規定の意義を見出すことができるように思われる。しかし不動の動者は決して「デュナミス」とは言われない。感覚的事物の世界では、能動的能力は運動の原理であり、能力としてのデュナミスであり、これは行使されていないあり方、可能的にあるというあり方が認められるものである。これに対して、不動の動者には可能的にあるというあり方はなく、それは常に現実態であり、永遠的なものとして存在する。このような対比を見るとき、能動的能力に関する論述は、不動の動者の独特なあり方を際立たせるという役割を果たしていると言うことができるのではないだろうか。このようにＺＨΘ巻に限定せず、Λ巻まで含めた〈あるもの〉の学という視点に立つことによって能動的能力に

関する論述の意義を語ることが可能であるように思われる。しかしこのような意義をより明確に示すには、やはりΛ巻の検討が不可欠であるので、これについても今後の課題とすることにしたい。

註

（1）Z巻第三章では質料形相論の観点から「基体」についての考察が行われ、Z巻第四―六章では質料形相論の観点に立たずに「本質」についての考察が行われる。そしてZ巻第七―九章において生成論が展開された後、Z巻第十―十二章において質料形相論の観点から「本質」についての考察が行われる。続くZ巻第十三―十六章では、プラトン主義者に対する批判の観点に立って「普遍」――「類」も含めて――についての考察が行われる。

（2）「可能的」あるいは「現実的」という表現への言及はZ巻第十三章と第十六章においてすでに見られる。しかし「質料―形相」の対概念を「可能態―現実態」の対概念によって明確に捉え直すことは、H巻に入ってから行われている。

（3）ZH巻の最後に位置するH巻第六章において結合体の一性の問題が取り上げられ、「可能態―現実態」の対概念がその問題の解決手段として用いられている。

（4）ZHΘ巻にはそれらの連続性を示すと考えられる参照が見られ、これを理由にしてZHΘ巻をまとまった論考とみなすことが可能である。Cf. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, 2 vols., Oxford, 1924, I, p. xviii.

（5）ただし、Z巻第七章において起動因としての「能力」への言及があり（Z7, 1032a28）、技術による生成（制作）に関する説明の中で技術的な知が問題にされている。

（6）Θ巻第九章では、善悪の問題と幾何学の問題に関して「可能態―現実態」の対概念がいかなる意味をもつかが示され、Θ巻第十章では、「可能態―現実態」の対概念によって捉えられる〈あるもの〉とは異なる、真としての〈あるもの〉について論じられている。

（7）本稿は、九州大学哲学会平成二十二年度大会（二〇一〇年九月二十五日、九州大学）において「能力と活動――アリストテレス『形而上学』Θ巻におけるメガラ派批判の意義――」と題して発表した原稿をもとにしている。発表時とその後にご批判やご意見をいただいた方々に感謝申し上げたい。そこでのご批判、ご意見を踏まえ、本稿では問題設定および扱う範囲を明確に限定し、発表原稿で論じたΘ巻におけるメガラ派批判の意義については別の機会に論じることにする。具体的に言うと、発表に際してメガラ派批判の後半部、そして能力と活動について論じた部分は本稿では取り上げず、その代わりに本稿のおわりで能動的能力の意義について考察することにした。なお、Θ巻第一章における「デュナミス」の用法、Θ巻第六章における「能力」から「可能態」への移行につい

ては、拙稿「能力と可能態――アリストテレス『形而上学』Θ巻における「デュナミス」の用法」、『立正大学文学部論叢』一二一号、二〇〇五年、七三―九四頁においてすでに論じている。

（8） この「変化」は広い意味での運動、生成一般を意味する。

（9） Δ巻第十二章におけるこの例によれば、能動的能力の規定における「他のもの」とは、当該の変化の産物ないし目的から見て「他のもの」と言われる能動者、すなわち当該の変化を引き起こすものである。Cf. Ross, 1924, I, p. 318, M. L. Gill, *Aristotle on Substance: The Paradox of Unity*, Princeton University Press, Princeton, 1989, p.173, C. Witt, *Ways of Being: Potentiality and Actuality in Aristotle's Metaphysics*, Cornell University Press, Ithaca, 2003, p.41.

（10） 先ほど、「変化が引き起こされる側のものの中での区別、すなわち、変化の起点と産物ないし目的との区別」と述べたが、厳密に言えば、変化の産物ないし目的は、変化が完了したもの、あるいは変化がそこに向かっているところのものである。変化が引き起こされる側のものとしては、変化の起点としての質料、そしてその質料から完成体に向かっている未完成のものを考えるべきだろう。

（11） 理性的部分を働かせて実際に建築するには、欲求（ὄρεξις）ないし選択（προαίρεσις）が不可欠である（Θ5, 1048a10-11）。

（12） アリストテレスはZ巻第七章において「技術」と「形相」を同一視している（Z7, 1032b13-14）。この同一視には問題があるように見えるが、アリストテレスはその同一視によって、技術が知識であり、知識が特定の形相に関する説明方式からなっていることを語ろうとしていたのではないかと考えられる。

（13） Cf. Ross, 1924, II, p. 244.

（14） このような考え方はΘ巻第五章に見られる（Θ5, 1048a13-21）。ただし、外部からの妨げがないということは、付け加える必要がないと説明されている。

（15） メガラ派の見解の論拠に関する以上の説明は、J. Beere, *Doing and Being: An Interpretation of Aristotle's Metaphysics Theta*, Oxford University Press, Oxford, 2009, pp. 91, 94-97 を参考にしている。

（16） 第二の反論は受動的能力についてであるが、後で見るように、能動的能力をもつものがアリストテレスの念頭にまずあって、それが受動的能力をもつものとして問題にされているので、第二の反論は能動的能力と無関係ではないと考えられる。

（17） Cf. S. Makin, *Aristotle, Metaphysics Book Θ, Translated with an Introduction and Commentary*, Clarendon Press, Oxford, 2006, p. 66, Beere, 2009, p. 103.

（18） テクストに示されていることに従う限りにおいて、そう解するのが自然である。Cf. Beere, 2009, p. 104. ただし、M. F. Burnyeat, et al., *Notes on Books Eta and Theta of Aristotle's Metaphysics*, Study Aids in Philosophy, Oxford, 1984, p. 65 には、次のような解釈

の可能性も示されている。すなわち、「熱いものがあるとすれば、それは熱いと感覚されている」ことについて、「熱くない」と「冷たい」、および「熱いと感覚されていない」と「熱くない（冷たい）と感覚されている」を同一のものとみなし、「それが冷たいと感覚されているなら、それは冷たい」ということをアリストテレスが認めており、プロタゴラスの説と同じことを語っていると解する可能性もある。

（19）『魂論』第二巻第五―七章を参照。

（20）Θ巻第一―二章における能動的能力は運動の原理として示されているが、見る能力はそのような原理ではないだろう。

本稿は科学研究費補助金若手研究（B）による研究成果の一部である。